いずボラ通信

No.１９１　　令和３年１月１日
発行　環境学館いずみボランティア

～環境学館いずみボランティアスタッフによる「いずみガイド」～

１２月のデキゴト

12 月 20 日（日）自然はともだち！

今日は森の恵みを使ってクリスマス用品作りでした。

テーブルには輪切りの木材･大小の松かさ、シイ・カヤ・カシの実などのどんぐり類、赤い実をつけた南天、緑のコウヤマキの葉などの森の恵みが用意され、そこにキンキラのスパンコール・彩の紙皿・リボン・白い綿を使って木材と粘土を土台にしてクリスマスケーキを作ります。

今年はコロナ感染予防のために、先ず手指消毒と検温の後受付をし、小学生と低学年に付き添いの保護者同伴で､一テーブルに一人･一組と間隔をあけて座り、本日の講師・高畑知子氏と石井修二氏から森の恵みの説明を受けました。

用意された径１０センチ厚さ５センチ程の木材は、高麗川上流の飯能の山から切られたヒノキの間伐材で樹齢３０年ほど、西川材と呼ばれ、江戸時代から川の流れを利用して材木を西から東の江戸へ流して運んだのでそう呼ばれたと。子どもたちは静かに聞いています。

また、緑のタラヨウの葉が配られました。万葉の昔から葉の裏に文字や絵で願いを書いて川に流した風習や、現代でもハガキ代わりに使うこともあり、大きな郵便局にはタラヨウの木が植えられているそうです。

講師の高畑さんには毎年ご指導いただき、石井さんは植木屋さん、樹木医です。そして、二人ともに森林インストラクターとして活躍されています。

いよいよクリスマスケーキ作りが始まります。まずタラヨウにメッセージヲ描き、前テーブルに用意された森の恵みを選んで各自の机に運び、静かに真剣に作業開始です。製作

時間２時間弱で完成するかと心配でしたが、粘土をこねながらどんどんイメージを膨らませているようです。木材にこねた粘土を乗せて飾りつけ開始。みんな工夫を凝らし、初参加の子どもも二度目の子どももボンドや電熱で接着するグルーガンを使いこなし、花を飾ったデコレーションケーキ風にしたり、大きな松かさを使ってツリーのようにしたり、粘土で小動物や人形を作ってケーキに乗せたり、森の恵みを使って楽しんでいました。

今年は一同集まっての作品展示はできず残念でしたが、みな力作揃いだったと思います。（Ｋ．Ｈ）